

しん ちょう
新ひだか町

か み も り
神 森 3 遺 跡

— 日高自動車道厚賀静内道路建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和6年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

しん ちょう
新ひだか町

か み も り
神 森 3 遺 跡

— 日高自動車道厚賀静内道路建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和6年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局が行う日高自動車道厚賀静内道路建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが令和6年度に発掘調査を実施した、日高郡新ひだか町神森3遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書(第381集)である。
2. 報告内容は、同遺跡令和6年度調査範囲1,034㎡から検出された遺構と遺物である。
3. 発掘調査は第2調査部第3調査課の土肥研晶と山中文雄が担当した。
4. 整理作業は現地図面類を山中が、編集ほかを土肥が担当した。
5. 本書の執筆は遺構については各担当者が記載し、末尾に文責者名を入れた。地形測量図、土層断面図、遺構図、遺物出土詳細図は山中が現地で3次元測量を行い図化した。
遺物の写真撮影は第1調査部第1調査課中山昭大がおこなった。
火山灰の分析、金属製品の保存処理、木製品の保存処理は第1調査部第1調査課の立田 理がおこなった。
6. 現地 土工事・測量・遺物分析について、下記に依頼・委託した。

土工事	株式会社 伊藤組
調査区の設定	新和測量株式会社
黒曜石産地分析	(株)バレオ・ラボ
放射性炭素年代測定	(株)バレオ・ラボ

7. 出土遺物は新ひだか町教育委員会が保管する。写真などの記録類は当センターが保管する。
8. 調査・報告にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。

北海道教委員会 赤井文人
新ひだか町役場 産業建設部 吉田大樹、八田敏之、小西亮平
新ひだか町博物館 斎藤大朋
新ひだか町教育委員会 田中康平
新冠町郷土資料館 新川剛生

記号等の説明

1. 本文中および図、表中では次の記号を用いた。遺構の種別は以下のとおり。
P：土坑 F：焼土 礫集中：SB 土器集中：PB フレイク集中：FB
焼骨集中：BB
遺構番号は確認した順に1号から番号を付した。
2. 掲載した遺構図等の縮尺は原則的に以下のとおりとし、図版右下に、スケールを付した。
土層断面図 1：40 遺構実測図 1：40 遺物出土詳細図 1：20
土器実測図 1：3 土器拓影図 1：3
剥片石器実測図 1：2 石斧・礫石器実測図 1：3
遺構平面図は上を北に統一して掲載した。また、それぞれの遺構平面図に最寄りの方眼杭の位置を2カ所記した。
3. 遺構の規模は、確認できた形状の上場長軸長×短軸長、上場から坑底面までの最大深を示し、土層図、遺構図中のレベルは標高(単位m)を示し、遺構ごとに方位記号を記している。出土した遺物について、土器はIV章にすべて掲載し、出土状況図に小さい実測図と、IV章の掲載番号を示した。
4. 土器の大きさは、器高は計測可能な個体の最大高で計測、口径・底径は計測可能なもののみ、器厚は胴部の平均的な厚みで示した。石器の大きさは最大長×最大幅×最大厚で(単位mm)記した。なお、推定のものについては、()で値を示した。
石器実測図中でたたき痕はV——Vで範囲を表した。また、自然面はドットで表現した。掲載遺物の写真は縮尺を統一していない。
5. 土層の観察には『標準土色帖』(小山・竹原1977)および『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会1984)を用いている。また、火山灰について以下の略号を用いている。
B-Tm：白頭山-苫小牧火山灰(946年降下)
Us-b：有珠山b火山灰(1663年8月降下)

目 次

例 言

記号等の説明

目 次

挿図・表・図版

I 緒 言

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 新ひだか町を取り巻く状況	1
4 調査に至る経緯	5
5 調査範囲とグリッドの設定	5
6 調査の方法	7
7 土層	7
8 火山灰について	10
9 整理の方法	13
(1) 記録と保管	13
(2) 遺物の分類	13
10 調査結果の概要	14

II 遺跡の環境と周辺の遺跡

1 地形	15
2 周辺の遺跡	15

III 遺 構

	23
--	----

IV 遺 物

1 遺物出土状況	29
2 土器	29
3 石器	30
4 近現代遺物	31

V 自然科学的分析

1 放射性炭素年代測定(AMS測定)	37
2 黒曜石原産地分析	40

VI まとめ

	43
--	----

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

図Ⅰ-1	静内駅周辺の変化	3	図Ⅳ-1	土器実測図	33
図Ⅰ-2	調査範囲と調査区の設定図	6	図Ⅳ-2	石器実測図(1)	34
図Ⅰ-3	A地区層序	8	図Ⅳ-3	石器実測図(2)	35
図Ⅰ-4	B地区層序	9	図Ⅳ-4	近現代の遺物	36
図Ⅰ-5	火山灰採取位置	11	図Ⅴ-1	暦年校正結果	38
図Ⅰ-6	各試料の銚物と火山ガラス	11	図Ⅴ-2	黒曜石産地分布図(東日本)	40
図Ⅰ-7	包含層出土土器・石器分布図	14	図Ⅴ-3	黒曜石産地推定判別図(1)	42
図Ⅱ-1	遺跡の位置と周辺の遺跡	16	図Ⅴ-4	黒曜石産地推定判別図(2)	42
図Ⅲ-1	遺構位置図	25			
図Ⅲ-2	P-1・F-1・3・5・6・7	26			
図Ⅲ-3	F-4・PB-1・2	27			
図Ⅲ-4	PB-3・SB-1	28			

表 目 次

表Ⅱ-1	静内川河口域の遺跡一覧	17
表Ⅲ-1	SB-1 確計測値	28
表Ⅳ-1	掲載土器一覧	32
表Ⅳ-2	掲載石器一覧	32
表Ⅳ-3	近現代遺物一覧	32
表Ⅴ-1	測定試料および処理	37
表Ⅴ-2	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	38
表Ⅴ-3	分析対象	40
表Ⅴ-4	東日本黒曜石産地の判別群	41
表Ⅴ-5	測定値および産地推定結果	42

図 版 目 次

図版Ⅲ-1	SB-1 出土遺物	28
図版 1	調査状況(1)	
図版 2	調査状況(2)	
図版 3	調査状況(3)	
図版 4	調査状況(4)	
図版 5	土器	
図版 6	石器	
図版 7	近現代遺物	

I 緒 言

1 調査要項

事業 名：日高自動車道厚賀静内道路建設工事埋蔵文化財発掘調査委託業務
 委託 者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
 遺 跡 名：神森3遺跡(北海道教育委員会登録番号K-05-154)
 所 在 地：日高郡新ひだか町静内神森10-4、8、9、24、42、46、47、48、50
 調 査 面 積：1,034㎡
 現地調査期間：令和6年5月9日～令和6年7月31日
 整 理 期 間：令和6年8月1日～令和7年3月31日

2 調査体制

令和6年度	理 事 長	長 沼 孝
	副 理 事 長	馬 橋 功 (事務局長兼任)
	常 務 理 事	鈴 木 信 (第1調査部長兼任)
	第2調査部	部 長 藤 井 浩
	第2調査部第3調査課	課 長 土 肥 研 晶 (発掘担当者)
		主 査 山 中 文 雄 (発掘担当者)
	第1調査部第1調査課	主 査 立 田 理

3 新ひだか町をとりまく状況

新ひだか町は、平成18年3月31日に静内町と三石町が合併して新たに誕生した。北海道日高振興局管内の中央に位置し、静内地区は管内の産業、経済、文化の中核都市となっている。日高管内は涼夏少雪の郷とよばれる温暖な気候に恵まれ、軽種馬生産の自然的な適地とされる。本地域の軽種馬生産頭数は全国の約8割を占め、農業算出額の割合も6割を超える主要産業となっている。牧の歴史は1872年(明治5年)に開拓使の長官黒田清隆が、静内郡、新冠郡、沙流郡にまたがる7万haに及ぶ牧場を(現在の独立行政法人家畜改良センター新冠牧場)を創設し、日高管内に散在していた野馬2,262頭を放牧したことからはじまる。1877年(明治10年)開拓使雇アメリカ人エドウィン・ダンの設計計画により牧場の整備を行い、雑種の改良が行われた。1882年(明治15年)開拓使が廃止され牧は農商務省の所管にうつるが、翌1883年(明治16年)12月には宮内省所管にうつり「新冠御料牧場」と改称した。

道内でも屈指の桜の名所である二十間道路は、1903年(明治36年)御料牧場を視察する皇族の行啓道路として幅20間、延長2里(約8km)で造成し、沿道の桜は1916年(大正5年)から3年間で近隣の山野からエゾヤマザクラを移植したものである。

その後、御料牧場は戦前・戦後に改称をくりかえし、昭和17年に新冠御用牧場となるが、昭和22年宮内省の廃止に伴い農林省に移管され「新冠種地区牧場」と改名した。

御料牧場は地域の畜産に対する関心を深め、明治10年頃から牧畜を行なう農家があらわれる。

のちの軍馬需要により明治末期から大正にかけて馬産経営農家がさらに増え、市場は拡大し馬産は安定した経過を辿った。昭和初年から数年続いた天候不調による大凶作も畜農業への転換の追い風となった。昭和5年の記録では静内では693戸の農家が2,910頭の競走馬や農用馬を飼育していた。

近年、軽種馬生産農家は飼育頭数が10頭以下の小規模な牧が減ってゆく一方で、一戸当たりの繁殖雌馬飼育頭数は増加傾向で、牧の大規模化が進んでいる状況である。軽種馬(競走用)飼育頭数は近年増加傾向で、令和4年度の総飼育頭数は約47,000頭、このうちの8割が日高管内で生産されている。

軽種馬の生産が主流となる以前は米の生産農家も多かったが、国の減反政策などもあり、静内川の流域に広がっていた田畑も年々減少、牧草地に変わってきている。そのようななか、町内の花卉事業では、三石産のデルフィニウムが全道一の作付面積をほこる。

漁業ではサケ・日高昆布が主要産物となっている。日高管内では、松前藩政下サル、ニイカッパ、シツナイ、ミツイシ、ウラカワ、シャマニ、ホロイツミの場所が置かれ、海産物ではコンブや干鮭が主な交易品であった。場所が開設された正確な記録は、1637年(寛永14年)の福山城の大火で記録類が焼失したため不明だが、1582年(天正10年)に五代慶広が家督相続、1660年(慶長5年)松前家六代盛広に譲っていることや、厚岸場所が寛永年間(1624～1644年)に開設されていることから、今から440年前にはおおい開設されていったものとみられる。日高昆布(標準名ミツイシコンブ)の繁殖域は十勝沿岸から白糠に至る地域、一部道南白川浜から恵山岬を経て汐首付近まで広がるが、日高管内が主産地で、なかでも襟裳岬付近が最も繁茂する。後幕政期には箱館の昆布輸出が激増し日高昆布の価値を上げていた。現在はサケの漁獲高が高くなっているが、日高昆布の生産額も次いで高く、2品目で全生産漁獲高の半分を占めている。

静内駅周辺は昭和から平成初期ころまで林産業の中心地であった。真沼津川河口から古川河口付近までの静内海岸町は原木土場として利用され、静内本場町には池内ベニヤ、米子組などが操業していた。70年代後半の空堀には工場直結の引込線もみられる。

池内ベニヤ株式会社は1945年(昭和20年)2月、様似町幌満の木簡工場を静内御幸町に移転操業、愛国第一六九工場に指定され航空機用単板、船舶用資材の生産にあたった。まもなく終戦となったが、占領軍宿舎ならびに兵舎用合板製造工場に指定され、昭和22年には製材工場も操業、戦後復興と輸出再開により経営を立て直した。昭和26年に個人経営から池内ベニヤ株式会社に改組、昭和30年の広葉樹合板輸出実績は全国の首位を占めた。1975年(昭和50年)より本社は静内本場町1丁目にある。

株式会社米子組は、先々代が新冠御料牧場大改築工事で建築を請負ったことから始まり、先代が1926年(大正15年)に建築材料を挽くために製材工場を設けたのが始まりで、1948年(昭和23年)米子木材株式会社を設立すると同時に土木・建築にも事業を拡大、社名を株式会社米子組と改めた。昭和30年代は木材の需要も大きく総合的な木材加工のため設備の拡充を、また、静内を中心とした日高管内の建設にもちからを注いだ。昭和50年代にはいると木材不況で、関連産業は厳しい状況下に陥り、合理化を行ってきたが、2000年(平成12年)5月倒産、関連3社のうち北静林業は整理された。

北海道旅客鉄道株式会社(JR北海道)は、日高本線における2015年の高波被害以来復旧することなく2021年(令和3年)4月1日、鶴川～様似間の鉄道事業を廃止した。

松前藩政下の七場所は、1869年(明治2年)に蝦夷改め北海道と改名し、北海道を十一国八十六郡に分割し国名・郡名を定めたおり、地名はそのままだ高国の七郡となった。日高本線は、これらの郡界を経由し苫小牧駅から様似駅までの路線距離146.5kmの鉄道だった。

静内駅は1926年(大正15年)王子製紙の関連会社であった日高拓殖鉄道(軌間762mm)が厚賀駅～静内駅延伸開通したことにより開業。翌1927年(昭和2年)8月1日、改正鉄道敷設法別表第133号に規定する予定線の一部として、日高拓殖鉄道と苫小牧軽便鉄道(王子製紙への木材輸送のため1909年(明治42年)三井物産が苫小牧～鶴川間に敷設した馬車鉄道で、まもなく蒸気機関化し1913年(大正2



1974～1978年の静内駅周辺の状況



2019年の静内駅周辺の状況

図 I-1 静内駅周辺の変化

年)開業)を国有化、改軌(軌間1,067mm)した路線で、1933年(昭和8年)から4年を費やし様似駅まで鉄道を延長した。

国鉄時代は1959年(昭和34年)に札幌－様似間を運転する臨時準急「えりも」が運転開始、1966年(昭和41年)には急行列車は1日3往復となり、1986年(昭和61年)11月のダイヤ改正まで存続した。

日高線を延伸し襟裳岬を回って帯広まで結ぶ日勝線計画もあり、帯広から南下し広尾までの路線距離84kmの広尾線は1932年(昭和7年)に開通したが、国鉄再建法の下赤字ローカル線に指定され、北海道旅客鉄道(以下JR北海道)に移行する前の1987年(昭和62年)2月2日廃止となった。

国鉄時代の日高線も度重なる自然災害をこうむり、その都度復旧に努め、1987年4月1日に全線をJR北海道に継承後も自然災害は絶えなかった。

2007年(平成19年)JR北海道は駅のナンバリングを実施するが、日高本線は対象から外された。

2015年(平成27年)の高波被害で鶴川－様似間の116kmが不通となり、以降代行バスを鶴川駅－静内駅間と静内駅－様似駅間で運行する。

2016年JR北海道は日高線の復旧後の維持にむけ、JR北海道と管内7町で維持費を負担することが必要との見解を示したが、その後もさらに災害は続き、2020年(令和2年)8月新ひだか町で開催された沿線7町による臨時町長会議で、2021年3月末で鶴川駅－様似駅間廃止を合意、2021年(令和3年)4月1日鶴川－様似間の鉄道事業廃止、日高管内の鉄路はなくなり、路線名のみに日高の名前が残ることとなった。

公共事業では、北海道開発局は2003年(平成15年)8月8日、北海道道111号の開発計画の凍結(実質中止)を決めた。

北海道道111号静内中札内線は日高(新ひだか町静内)と十勝(中札内)を結ぶ主要道道として昭和59年から整備を進められた。起点は北海道日高郡新ひだか町静内田原(北海道道71号平取静内線・北海道道1025号静内浦河線交点)、終点は北海道河西郡中札内村東1条南8丁目(国道236号交点)総延長79.601kmの計画であった。現在開通している区間については、工期19年、建設費約540億円を費やしたが、工事計画の見直しや自然保護の観点から工事計画の凍結を決断、地元工事業者に大きな影響を与えた。

近年、静内を創業地とし業績を拡大している企業に會澤高圧コンクリート株式会社や株式会社シズナイロゴスがある。

會澤高圧コンクリート株式会社は、バクテリアの代謝機能を用いてコンクリートを自己治癒させるテクノロジーを世界で初めて実用化し、世界的に注目を集めている。

創業者の會沢芳之介は、1935年(昭和10年)静内本町にコンクリート工業を始めた。1950年(昭和25年)には静内産業株式会社を設立した。その後コンクリートの需要が急速に増大し、1963年(昭和38年)6月、静内中野に會澤高圧コンクリート株式会社を創立、現在本社は苫小牧にあるが、創業地の静内は本店となっている。

物流中堅の株式会社シズナイロゴスは創業者の伊藤工が恵庭市で営業していた伊藤ハイヤーを譲渡し、1940年(昭和15年)静内運輸有限公司として普通トラック3台で創業したことにはじまる。戦時中は戦時重要物資輸送即応体制のため、強制的に他運送会社に統合されるが、戦後企業分割が行われた際、胆振自動車株式会社を創設し、静内営業所として独立の一步を歩み始める。

1952年(昭和27年)2月、静内自動車運輸株式会社を設立、木材運搬などを手掛けてきたが、1961年(昭和36年)から路線事業に専念し事業を拡大、2003年(平成15年)本社を白石流通センターに移動、社名をシズナイロゴス株式会社に変更した。

4 調査に至る経緯

日高自動車道は苫小牧市を起点とし浦河町に至る高規格道路で、国土交通省室蘭開発建設部(以下、室蘭開建)が昭和63年度から整備している事業である。この高規格道は、高速ネットワークの拡充による近隣都市間の連絡機能の強化や地域間交流の活性化、経済的には畜産品、農産品、水産品の苫小牧港、新千歳空港への物流効率化、災害時や緊急搬送時の安全かつ速達性の高い搬送ルートの強化が目的とされ、日高線廃線後の管内の重要な交通インフラとなる。2024年(令和6年)5月22日、環境省の中央環境審議会自然環境部会が日高山脈襟裳国定公園を解除し面積を2倍以上に広げ日高山脈襟裳十勝国立公園とすると答申、同年6月25日国内35カ所目の国立公園が指定されたこともあわせ、地域の活性化が期待される。

工事の進捗は、平成10年に苫小牧東IC～厚真IC間19.7km、平成15年8月に鶴川IC間8.6km、平成18年3月に日高富川間11.4km、平成24年3月に日高門別IC間5.8km、平成30年4月に日高厚賀IC間14.2kmが開通し、厚賀静内道路では新冠IC(仮称)が令和7年度に部分供用を予定している。

神森3遺跡の試掘調査は令和5年9月21日～22日に、厚賀静内道路の終点である静内IC(仮称)が道道71号に交差する地点の5,250㎡を対象に北海道教育委員会(以下、道教委)が新ひだか町教育委員会(以下、町教委)と室蘭開建立会の下実施した。試掘穴は21カ所設定し、このうち1カ所から縄文時代後期の土器片がまとまって検出された。この結果から、土器が検出された試掘穴を中心に、町道を挟んだ北側A地区の505㎡と町道南側のB地区522㎡の合計1,027㎡の発掘調査が必要と判断された。また、調査範囲の中央を通る町道下の200㎡については、道路が舗装されていることから遺構・遺物は残存していないと判断され、施工時に町教委が立会して影響の有無を確認することとなった。

発掘調査は(公財)北海道埋蔵文化財センターが受託、当センターは令和6年5月9日から発掘調査に着手した。7月下旬、A地区の一部で調査区外に遺物が続くことが確認され、調査も終盤に迫った7月22日、道教委・室蘭開建立会いの下協議を実施し、A地区の7㎡の発掘調査が追加され、協議後ただちに着手、令和6年7月31日1,034㎡の発掘調査を終えた。

5 調査範囲とグリッドの設定

現地調査の基本図は、室蘭開建作成の「日高自動車道静内厚賀道路静内IC用地測量業務用地平面図1:500」を使用した。発掘区の基線是世界測地系(平面直角座標XⅡ系)を使用した。X座標=-183000・Y座標=10700とX座標=-183100・Y座標=10700の2地点間を5m間隔で区切る方眼を設定、南北方向に大文字のアルファベット、東西方向にアラビア数字をあてはめ杭番号とし、北東側の杭を個々の発掘区の呼称とした。

水準測量は調査区付近の道道71号わきに室蘭開建が設置した2級基準点H29-2005を用いて仮BM No.3 (H=8.973)を設置し各測量に使用した。



図 I-2 調査範囲と調査区の設定図

6 調査の方法

調査区内はもとも宅地であったため、住宅の基礎や埋設設備などの攪乱を受ける範囲は広がった。A地区は全域に住宅基礎があったが、建築年代による基礎の違いのためか包含層の残りは良好であった。表土を除去した時点で包含層に達しているとみられたため、当初から移植で掘削、出土遺物などは計測した。B地区は南側が低地のため、宅地にする際道路との段差をなくすため、厚いところで1.5mほど砂利を盛っていた。そのため包含層の残りは良く、層厚も深いところで約70cmあった。このため掘削は当初からスコップで実施した。北側は住宅基礎がV層に達していた。遺物が確認されしだい移植による掘削に切り替え、出土地点を計測し取り上げた。

7 土層

基本土層はI層からV層に分層した。

I層：表土黒色～黒褐色土表土、耕作土

B地区の低地では宅地造成のため、耕作土上に静内川周辺を掘削したとみられる粒径のそろわない河原石が多量に混じる明黄褐色シルト質土が道道側の厚いところで150cmほど盛土され、A地区側の舗装道路縁ではさらに上に道路舗装の下地の粒径のそろわない河原石が多量に混じる黄灰色砂礫層が50cmほど盛られる。厚いところで50cmほどあるが、よく観察すると耕作土も耕作時期の違いで3層に分けられる。耕作土は表土の黒色土に下位の有珠山火山灰が混入する。

II層：灰白色火山灰層有珠山b火山灰層(Us-b, 1663年降下)

A地区でもわずかに残っている部分がみられたが、主にB地区低地部分に遺存していた。層厚は10cm前後であるが、土坑の落ち込み上部などの残りの良い部分では、本層の上部が黄褐色に変化している部分があり、さらにその上に薄く黒色土を挟み5YR8/1のわずかに赤み帯びた灰白色火山灰層の堆積を観察できる。

III層：Ⅲ-1層 黒色土 B地区では有珠山b火山灰層に接する部分が最も黒く、下位ほど暗褐色土に変化する。また、B地区低地の最も低い部分では、本層中の黒色土と暗褐色土の境付近に白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm, 946年頃降下)の堆積がみられる部分がある。

Ⅲ-2層 灰褐色土 明るい色調の腐植の弱いローム層、低地の低い部分では洪水堆積物とみられる水平堆積する明黄褐色のシルト質粘土層などがみられ、4～5層に分奏できる。縄文時代晩期以降の遺物包含層とみられ、土坑1基を検出している。

Ⅲ-3層 黒褐色土 Ⅲ-2層境ほど黒色で下位ほど褐色土に変化する。
縄文時代晩期後葉の遺物包含層とみられB地区で石鏃1点を検出している。

IV層：ぶい褐色土や腐食のはいるシルト質土層縄文時代後期前葉の遺物包含層

V層：ぶい黄橙土シルト質土層無遺物層

Vより下：礫層や砂層が互層に堆積する

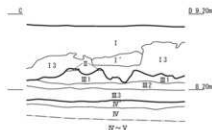
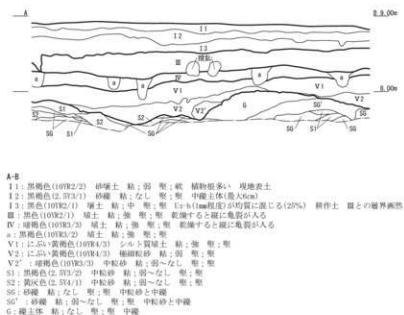
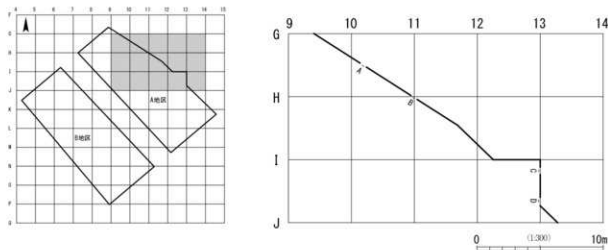


図 I-3 A地区層序

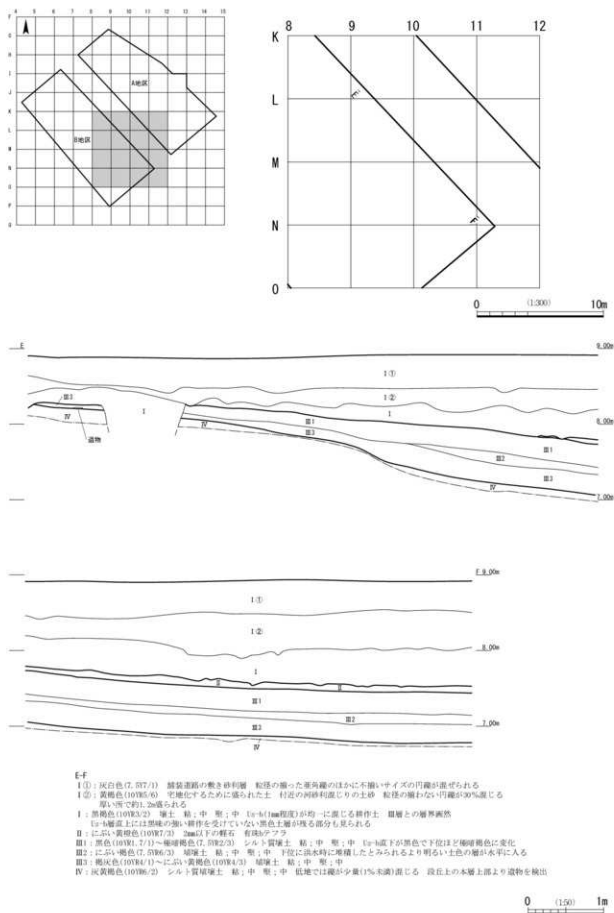


図 I-4 B地区層序

8 火山灰について

周辺の火山灰調査事例について

日高管内での発掘調査に関連して、屈折率測定等による火山灰同定が行われた遺跡は、平取町カンカン2遺跡、シリ3遺跡、パンケヌツチミフ遺跡(平取町教委1996、2002、2010)、門別町(現日高町)エサヌップ4遺跡、コムカラ遺跡(門別町教委1987、2004)、日高町チャラセナイ遺跡、マウタサップ遺跡、ケノマイ2遺跡(日高町教委2009、2015)、浦河町東栄2遺跡(浦河町教委1989)がある。このほかに当地域の火山灰と人類の関わりを考察した徳井由美による一連の業績がある(徳井1989、1993)。これらの成果を元に神森3 遺跡の不明火山灰について推定を行う。

検討の方法

神森3 遺跡で検出された火山灰は、基本層序におけるⅡ層(試料①)、その上位に局所的に認められる1層(試料②)、さらにⅢ-1層中の1層(試料③)の計3層である(図I-5参照)。以下資料番号順に特徴を述べる。

試料①色調: 10YR7/4にぶい黄褐色大層厚10cm

特徴: 径3mm以下の軽石からなる。堆積上部はやや細粒となるが、級化構造は明瞭ではない。

試料②色調: 7.5YR8/2灰白色最大層厚1.5cm

特徴: 径2mm以下の軽石からなる。B地区の低地部分に局所的に認められる。

試料①との間に5mm程度の黒色土の薄層が認められる。

試料③色調: 10YR8/2灰白色最大層厚1.5cm

特徴: シルト質。層界は上下ともやや不明瞭。

遺物包含層はこれより下位にあり、縄文時代晩期に相当するⅢ-3層、及び縄文時代後期のⅣ層である。このことから、火山灰は縄文時代晩期以降の降灰となる。比定される可能性がある既知の火山灰は、2節に示した先行業績から、上位のものは1663年降下の有珠b降下軽石層(Us-b)、1667年降下の樽前b降下軽石層(Ta-b)、下位は白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)、または樽前c2降下火砕堆積物(Ta-c)のいずれかに相当すると予想される。

試料の調整

各試料は以下A～Dの工程で調整を行った。A)超音波洗浄後、定温乾燥器にて乾燥。B)篩分け。用いた目数は4、2、1/2、1/4、1/8、1/16mmである。C)中粒砂サイズ(1/2～1/4mm)の試料を実体顕微鏡観察。D)細粒砂サイズ(1/2～1/4mm)の各試料にて、実体顕微鏡用、偏光顕微鏡用の2種のプレパラートを作成した。ただし、試料③については、ほぼ極細粒砂サイズ(1/8～1/16mm)であったので、観察、プレパラートともにこのサイズで行っている。実体顕微鏡用のプレパラートは試料をそのまま接着したものであるが、偏光顕微鏡用は、カルドフィックスを用いて封入試料を作成し、両面を研磨してスライドガラスに貼り付けている。試料の研磨はダイヤモンド砥石(#150→600)カーボラダム(#1000、3000)の順に手摺で行った。

検討の方法

偏光顕微鏡による鉱物同定、火山ガラス形態判別について検討する。鉱物同定は偏光顕微鏡用プレパラートで同定し、その情報を元にして実体顕微鏡用プレパラートで確認する方法で行った。検討は主として『新編火山灰アトラス』(町田・新井1992)の記載を元に、鉱物組成、火山ガラス形態そして層位的関係から最も矛盾のないテフラを選んだ。観察はニコン社製エクリプスE600POL、写真は同社デジタルカメラDS-1000を用いている。

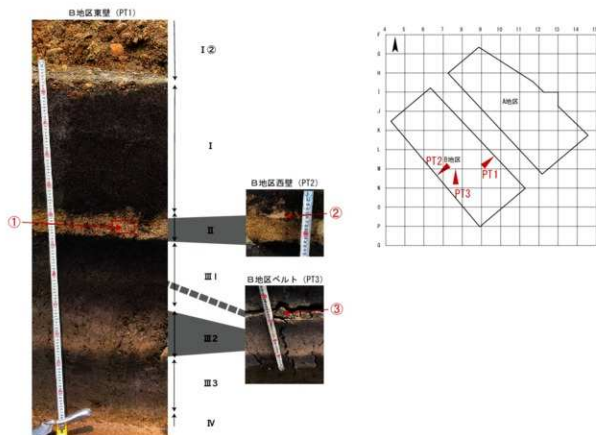


図 I-5 火山灰採取位置



図版 I-6 各試料の鉱物と火山ガラス

検鏡結果

観察の結果、以下の斑晶鉱物、火山ガラスを確認し、写真V-1にその写真を掲載した。

試料①：斑晶鉱物＝直方輝石・単斜輝石・角閃石火山ガラス：軽石型

試料②：斑晶鉱物＝直方輝石・単斜輝石・角閃石火山ガラス：軽石型

試料③：斑晶鉱物＝アルカリ長石、火山ガラス：バブル型・ファイバー型

それぞれ写真に基づき説明する。

試料①：直方輝石の画像は偏光顕微鏡用プレパラートである。上下ともクロスニコル。下は消光状態のもの。長柱状で明瞭な劈開があり、直消光することから判断した。単斜輝石は実体顕微鏡用のプレパラートである。短柱状の結晶で、多色性がほとんどないこと、約40度の斜消光であることから判断した。角閃石はやや厚手であるが偏光顕微鏡用に作成したプレパラートの画像である。結晶の伸長方向の断面である。自形で劈開が120°で交差していることが明瞭である。下段は消光時。約25°で消光している。これらより判断した。量比は算出していないが、直方輝石が多く、次いで単斜輝石、角閃石はまれである。火山ガラスは発泡した軽石状のものがほとんどである。

試料②：直方輝石、単斜輝石は実体顕微鏡用のプレパラートで確認した。直方輝石は淡緑色の多色性があり、直消光する。単斜輝石は多色性がほとんどなく、40°程で射消光する。角閃石は偏光顕微鏡用のプレパラートで確認した。上がオープン、下がクロスニコルである。暗緑色の多色性が明瞭で消光角は20°ほど、角閃石である。量比は概ね試料①と同じ傾向であった。

試料③：アルカリ長石は偏光顕微鏡用プレパラートで確認した。長柱状の結晶で直消光すること、コンoscope像において二軸性結晶の特徴を示すことから判断した。写真は左がオープン、右がクロスニコル、後者は消光状態である。火山ガラスはバブル型とファイバー型で構成され、斑晶鉱物の量比を圧倒して多い。

考察

試料①は微量であるが角閃石が認められること、層厚が静内川の河口での徳井の調査と整合すること(徳井1989)と合わせ、Us-bであることはほぼ確実とみられる。より上位に部分的にみられる試料②は①と鉱物組成、特に角閃石が認められることから、有珠山が供給源となっている可能性がある。間層として薄いながらも黒色土が形成されていること、また色調がやや赤味を帯びるようにもみられることを重視すれば、中川光弘らの指摘する17世紀末の「先明和噴火」(中川他2005)の可能性もある。同定には各鉱物の屈折率等の検討が必要である。試料③については、アルカリ長石の存在と火山ガラスの形状からB-Tmと考えて層位的な矛盾はない。ただし厳密な確定には火山ガラスの屈折率の測定が必要である。

(立田)

引用文献

- 徳井由美1989「北海道における17世紀以降の火山噴火とその人文環境への影響」『お茶の水地理』第30号
徳井由美1993「近世の北海道を襲った火山噴火」『火山灰考古学』古今書院
中川光弘・松本亜希子・田近淳・広瀬亘・大津直2005「有珠火山噴火史の再検討：寛文噴火(1663年)と明和噴火(1769年)に挟まれた17世紀末の先明和噴火の発見」『火山』第50巻第2号
町田洋・新井房夫1992『新編火山灰アトラス』東京大学出版会

9 整理の方法

取り上げた遺物は、現地で分類し集計した。注記は大きな遺物に対し以下のように実施した。

なお、神森3遺跡は「カミ3」と略記した。

包含層の遺物：カミ3、グリッド名、層位、取り上げ番号

遺 構 の 遺 物：カミ3、遺構番号、取り上げ番号

B 調査出土土器：5月15日の調査でB調査から出土した破片

：カミ3、I-9 B 515

B 調 の 遺 物：カミ3、I-9 B

遺物の出土グリッド、層位、点数、分類名、日付などの情報は「遺物カード」に記録し、遺物とともにビニール袋へ入れ収納した。カードの情報は集計し、一覧表を作成した。

(1) 記録と保管

現地での測量データ、土器・石器などの実測図、写真などの記録は当センターにおいて保管する。遺物は報告書刊行の後、新ひだか町教育委員会が保管する。

(2) 遺物の分類

土器

土器は便宜的に縄文時代早期に属する資料をⅠ群、以下順に前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、統縄文時代をⅥ群、擦文時代相当のものをⅦ群とし、各群にアルファベットの小文字を組み合わせて、前半(a類)、後半(b類)、あるいは前葉(a類)、中葉(b類)、後葉(c類)に分類している。

本遺跡から出土した土器はすべて縄文時代後期前葉のⅣ群a類に相当する。

石器

出土した石器等は石鏃、石槍・またはナイフ、石錐、スクレイパー、Rフレイク、石斧、たたき石、凹み石、台石に分類した。石鏃と石槍の境は5cmで、スクレイパーとRフレイクは加工痕が使用痕かで分け、石錐は端部に突出部が作り出されたもの、石斧は研磨で整形された斧状の刃部を有するもの、たたき石・凹み石・台石は、敲打痕が認められる鏝で、手に持って使用されたと想定されるものをたたき石、台として使用された可能性のあるものを凹み石、置いて使用したとみられるものを台石とした。

10 調査結果の概要

神森3遺跡はA地区505㎡、B地区522㎡、合わせて1,027㎡の発掘調査を実施した。

A地区では低位段丘面上から焼土7カ所、土器片集中3カ所、剥片集中2カ所、礫集中1カ所、骨片集中1カ所を検出した。

焼土はすべてIV層の標高8.1m～8.3mの間から検出され、焼土の周囲から様々な遺物が出土する状況であった。遺物はIV層出土で、土器はすべて縄文時代後期前葉のタブコ式に相当することから、検出された遺構、遺物も同時期のものと考えられる。

A地区から検出された遺構や遺物の状況から、縄文時代後期前葉に静内川右岸に広がる沖積地で狩りを行う際のキャンプサイト的な場所であったと想定される。

B地区の調査区南側半分は標高8m以下の低地堆積で、包含層は厚く遺存していたが、遺物はほぼ検出されなかった。

唯一検出されたのは、縄文時代後期前葉以降の層から無茎で凹基の黒曜石製の石鏃1点で、形状の特徴から時期は縄文時代晩期後葉以降のもと考えられる。

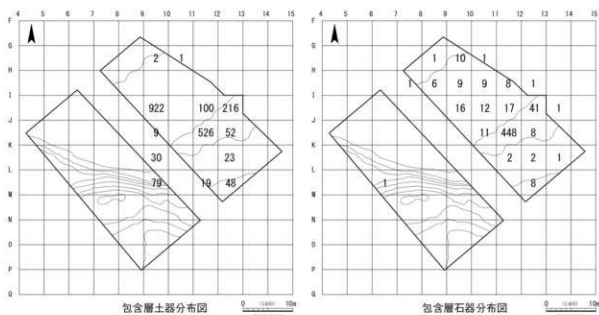
遺構は、石鏃出土層位より上層から掘り込まれたとみられ、覆土上部に有珠火山灰が落ち込む土坑が1基検出された。

土坑から遺物は検出されなかったが、石鏃より上層から掘り込まれていることから、縄文時代晩期後葉以降の土坑と考えられる。

また、土坑覆土の堆積状況は道央圏の縄文時代晩期後葉以降によくみられる埋め戻しのない土坑の覆土堆積状況に似る。ただし、道央圏におけるこのような土坑は墓の周辺に複数分布するのが通常で、単体で検出される例はない。

低位の段丘上からは、A地区寄りの狭い範囲から縄文時代後期前葉の土器片が109点検出された。これは6mほど離れたA地区からの続きの遺物で、道路の敷砂利層よりも下から出土しているため、道路下に遺構や遺物が残っている可能性もあると考えられる。

出土遺物総数は2,642点で、B地区からは110点の遺物が検出されているため、出土遺物の96%がA地区より出土したことになる。



図I-7 包含層出土土器・石器分布図

II 遺跡の環境と周辺の遺跡

1 地 形

日高支庁と十勝支庁の境は日高山脈の稜線で別れ、新ひだか町は山脈稜線で十勝の中札内村と大樹町と接し、同じ管内では丘陵稜線を境に東は浦河町、西は新冠町と接する。2024年6月25日、新ひだか町の面積の三分の一ほどの山岳部が国立公園に指定された。静内川は、日高山脈の主脈であるカムイエクウチカウシ山(アイヌ語で「熊(神)の転げ落ちる山」)標高1,979m付近より源を発するコイボクシュシビチャリ川とベデガリ岳標高1,736m付近より源を発するコイカクシュシビチャリ川との合流点でメナシベツ川と呼称を変え、ナメワッカ岳付近より源を発するシュンベツ川との合流点である農屋付近で静内川と再度呼称を変え太平洋に注ぐ。人口の大部分は太平洋岸と静内川沿いの沖積平野に集中し、河口域は工業地や商業地が広がり、郊外には田畑、丘陵地には酪農地帯が広がる。

2 周辺の遺跡

シツナイはかつて現在の静内春立(静内川河口より東に約11km旧地名元静内)のアイヌ語地名で、運上屋が置かれこの地一帯を静内場所と呼んでいた。明治4年、徳島藩淡路須本の城代家老の稲田九郎兵衛邦植、以下家臣546名が移住を命ぜられ上陸した地でもある。のちに染退川(シベチャリ川・静内川)河口に運上屋が移されてからも、静内場所と呼ばれたため、いまの場所が静内と呼ばれるようになった。アイヌ語のシツツナイ(曾祖母の沢)、シュツナイ(ブドウの沢)、シュツネー(狭い沢の入り口)など諸説ある。「東蝦夷地誌」の中で、1858年(安政5年)8月シベチャリを踏査した松浦武四郎は「…本名シベイチヤンとて鮭が卵置処の儀。往昔ホマリモイと云いしが、連年不漁にて土人難漁し、神に祈りしかば、此名を附よし霊夢を蒙りしに、其後打続大漁なりと云伝ふ…」と記している。

神森は昭和9年から現在までの行政字名で、もとは静内大字静内村上下方、地区皇祖神社(神武天皇社)が鎮座する「神の森」と上下方の「上」を合わせた命名である。

町内の遺跡は静内町と三石町の合併により令和6年現在154カ所が登録されている。神森3遺跡は其中で最も新しい154番である。

神森3遺跡周辺の主な遺跡は静内川右岸の段丘面上に分布し、神森3遺跡のように標高10m以下の低地で見つかる遺跡は少ない。また、町内の遺跡を概観するにあたり、北海道静内高等学校の郷土史研究部(昭和38年11月～文化人類学研究部)の活動は無視できない。

国体史観・皇国史観に基づく歴史教育の見直しから始まる戦後教育現場における遺跡調査事例は多いが、静内高校の活動は群を抜いている。また、活動範囲も町内に留まらず、日高管内全域を中心に苫小牧市、白老町、虻田町(洞爺湖町)、伊達市、千歳市、積丹半島(神恵内村)にも及ぶ。その活動をささえた顧問が、1951年(昭和26年)から14年10カ月の間在職した藤本英夫である。

研究会は藤本が就任後まもない昭和26年12月のある授業終わりに、一人の少年が真歌山の沢で拾った土器のかけらを見せてくれたことから始まり、冬の間に関心のある生徒で同好会をつくり、翌昭和27年5月に研究部発足、同月、御殿山、8月に中野、静内高校々庭遺跡、10月には駒場貝塚、真歌山など精力的に町内の遺跡を発見してゆく。昭和25年が静内町開基80年にあたり、記念行事の一つとして町史編さんが行われており、日高郷土研究ケバウ会も町史資料収集の一環として1952年から翌年(昭和27・28年)にかけ、郷土史研究部と協力して町内の主要な遺跡の発掘調査を実施、調査報告「静内町町史資料第1集」を1954年(昭和29年)7月に刊行している。

神森3遺跡周辺の主な遺跡を静内川右岸の真沼津川河口域の右岸段丘上を海側から概観する。